

青嶺

Seirei

文責 田中泰司

伊万里市立青嶺中学校

熱戦続く中総体！

先週末から続いている

中学校総合体育大会は、バレー部が青嶺中になって初めての優勝、卓球部が団体戦県大会出場と、熱戦を繰り広げ、地区の代表権を手に入れました。本当におめでとう！

野球部は山代中との合同チームで、準優勝した西有田中を一点差まで追い詰めた接戦でした。

陸上競技と相撲はこれからですが、県大会に出場を決めた二つの部と同様に、これまでの練習を信じ、青嶺中らしさを存分に発揮し、悔いを残さず頑張ってきてほしいと願っています。

K君のこと

僕が大学生だったとき、K君という中学三年生の男の子と知り合いました。最初の印象としては、非常におとなしく、はにかみやであつたように覚えていますが、話しかけても、ほとんど返答がなく、しかし穏やかに微笑み返します。どこことなく表情に影がありました。時折見せる鋭い視線がそのとき少しだけ気になりました。

知り合ってから程なくして、彼に勉強を教えるようになりまし。彼は、勉強は余り好きでなく、退屈そうでしたが、数学だけは好きで一生懸命に取り組んでいました。また、バイクで教えるに行っていました。バイクや車に話すそれらの話が楽しみのよう、目を輝かせていつも聞き入っていました。

当初、おとなしかったK君でしたが、徐々に会話を交わすようになりお互いに少しずつ理解するようになってきました。彼が、動物が大好きで拾ってきた犬のために自分で犬小屋を建

てたことや、将来大工になって色んなものを作りたいという夢を持っていることなどを。ポツポツと話してくれるようになりまし。彼の家族とも親しくなり、特に4つ年上の美容師志望のお兄ちゃんとは仲良くなりました。

バイクが盗まれた時は夜遅くまで一緒に探してくれて、K君が倉庫の裏に放置されているのを走って知らせに来てくれました。家庭教師をし始めてしばらくしてあることに気がつきました。K君は普段は表情が穏やかで、勉強も好きでなくても頑張っており目がうつろで話しかけても反応が余りないときがあるのです。はじめは疲れているのかな？と軽く考えていました。

しかしある日いつもの時間に家に行くとお兄ちゃんが「先生、Kがまた家に帰ってきたとらんけん。今日はごめんけど休みにして。」と言ってきました。家にも誰もいません。そうやって休むのは初めてだったので、嫌な胸騒ぎがしてバイクのところでK君が戻ってくるまで待とうと思ひ、しばらくその場で待つことにしました。二時間くらいして、お兄ちゃんとK君とご両親と一緒に連れ立って戻ってきました。お兄ちゃんが驚いて、僕のところに駆け寄り「先生！待っててくれたん？ごめん、でもありがと！う……」と言ってくれました。僕はK君に声をかけたのですが、チラッとこちらに

目をやったのですが、そのままご両親に連れられて家に入っていきました。非常にうつろな、焦点が定まっていけないような、生気のない目でした。それは、見覚えのある、あの目と同じだったのです。

お兄ちゃんが呆然としている僕に全てを話しました。「先生実はな、Kはシンナーをやつとるんよ……」お兄ちゃんの話はこうでした。ここ数年両親の仲が悪くなり、おとなしく心の優しいK君はものすごく気にやんでいました。K君が犬を拾ってきたときも、父親が激怒し何度も捨ててくるように言われ、彼にとつて家は心の休まる場所ではなかったようです。そんな時、服装や言動がずさんできたのに気がついた悪い仲間から、勧められるままにシンナーを吸ってしまったようだというのです。

お兄ちゃんは最初に気がついてから、言い聞かせたり時には殴ったりしてなんとか弟に止めさせようと頑張ったそうですが、兄の目を盗んでは繰り返し常用していたそうです。いつか家庭教師の日に僕が感じていたのは薬物でやられた死んだ目だったのです。「先生が来るけど思つて、水ぶっかけてあそこまで戻したんじゃけど、やつば変やつたやろ？」と済まなさそうに言いました。「シンナー辞めるのは、難しいんよ。意志が強くて本当に大変なんよ。まあ、意志が弱いけえシンナーなんか走るんやけどな……」お兄ちゃんはそう言いながら、

シャツの袖をめくり、腕を見せました。左腕に大きな焼け爛（ただ）れた跡があります。ひどい傷跡です。「わしがKが（シンナーを）やつとる、と気付いたのは、自分が前にやつとつたからなんよ。自分がやつとつてそんなこと言えんけど、同じ思いはしてほしくなかった……」

彼は腕の傷のわけを話してくれました。中学時代突っ張っていたお兄ちゃんは、何でも一通り悪いとされていたことには手を出したそうです。喫煙・万引き・暴力事件・恐喝……そうして、当然のようにシンナーにも手を染めたということでした。

カッコつけて吸つたものの、歯が溶け出したり、自分の行動をよく思い出せなくなったりしてくるにつれて、恐怖心が徐々に芽生えてきたそうです。「止めたい」そう強く思うようになり決心した……ところが、止められないのです。止めようとしても、幻が見えたり、声が聞こえたりする禁断症状が襲い、それを打ち消すために、また吸ってしまう。そんなことの繰り返しだったそうです。

何度も何度もそんなことを繰り返して、彼は肉体も心もボロボロになっていくのを感じたそうです。シンナーに手を出したことを何度も後悔したそうです。

もう、これ以上どうすることもできないと覚悟を決めたお兄ちゃんは、部屋に閉じこもって、絶対にシンナーを止める決心をしました。しばらくすると禁断症状が襲ってきました。苦しみなながらも彼は耐え続けたそうです。どうしても逃れることは